

バッハがふたつ目の就職先ポストをミュルハウゼンで得たのは 22 歳の時だった。それは 1707 年から 1708 年までの 1 年間しか続かなかったが、当時の風説では、彼の雇い主であるブラジウス教会に勤めるピエタ派司祭のヨハン・アドルフ・フローネともうひとつの主要教会であるマリア教会の正統派司祭ゲオルク・クリスチャン・アイルマーとの間の争いに巻き込まれたようだ。むしろ彼がなぜ早々と退任したかのもっと前向きな説明は、ワイマール宮廷で新しいオルガンの落成式に併せて彼としては辞退しがたいオファーを受けたからで、そこでならミュルハウゼンであてがわれていたパートタイマーやアマチュアとか町の音楽家の寄せ集め相手ではなく、もっと刺激的でプロ意識のある音楽家たちと仕事する機会が得られるからだった。しかしミュルハウゼンはリューベック同様『自由皇帝都市』で、バッハはそこでのブクステフーデ体制の繁栄を目にしていた。それらの都市の顧問官は、地域の小君主にではなく直接ウィーンの皇帝に返事をする事ができたので、バッハにとってもそれは魅力だったに違いない。そしてバッハはここで「神の栄光のための音楽を定期的に順序立てて」作曲するという彼の生涯の目標に着手するのである。これはとてつもなく野心的な事業で、その後のライプツィヒでの仕事の試金石ともなる。ワイマールへの転進に際し、バッハはミュルハウゼン市の神父たちに、「ここで遭遇した反対や苛立ちから離れて教会音楽をさらに良くするため、自分が最も気にかけている目的を追求したい」と説明していた。にもかかわらず、彼はワイマールに移った後も市との良好な関係を維持して、Ratswahl カンタータ(BWV29, 71, 120)の演奏のため戻ったり、オルガンの修理に目を光らせてたりしていた。

バッハが実質的にミュルハウゼンの楽長という地位を確立していた決定的な証拠は、1708 年 2 月の市議会選挙に向けて「祝いの教会モテット」作曲の依頼を受けたことにある。バッハの作品中でも BWV71「神は我が王」のような音楽は他に見当たらない。歌手たちの起用法についてもこれほど壮大な規模で臨んだ作品はなく、独唱者による 4 名の声楽コンソートに対して、別個の手段としての「合唱」、任意追加でリピエノによるカペーレ、そしてオルガンだ。様式と年代の双方でバッハの作品に最も近い例はブクステフーデのオラトリオ最後の 2 作品で、それはリューベック市が皇帝レオポルド 1 世の死を悼み、後継者のヨーゼフ 1 世への誓いを 1705 年 12 月に劇場的な華やかさで表明したものだ。間違いなくバッハはそこに臨席したはずで、その 2 年後に作曲した「神は我が王」はブクステフーデに捧げた数多くの作曲の中のひとつであり、リューベックでの「夕べの音楽」は今やテキストしか残されていないが、その説得力ある音楽体験を精製したのもあろう。

バッハはこの豪華な政治的祝典用に作品を書き、市政の独立を誇るミュルハウゼンはそれを活かして最大限良いところを見せようとしていた。1708年2月4日の朝、マリア教会の大きな鐘が7時から8時まで鳴り響いた。2組のブラスバンドが市庁舎から教会へ市参議会員42名と行政官6名の公式行列を先導した。任期を終えた参議会員たちが先を行き、新しく選任された後任会員がそれに続き、市職員たちがしんがりを務めた。教会では最初の賛美歌のあとにまず説教、そして呼び物は新参議会員を歓迎するバッハのモテットである。そのテキストには少なくとも1名の行政官(80代)の年齢について話題としての言及が含まれており、市の優れた統治、スペイン王位継承者の戦争への当てつけ、ヨーゼフ1世への賛辞などが聖書の引用と混ぜ合わせになっている。牧師の祝福と最後の賛美歌の後、新任参議会員は教会入口の屋外に整列し、そこで彼らは宣誓を行う。宣誓文は入口に立つSyndicusによって読み上げられる。そして行列は新参議会員たちを先頭に再び整列し、市庁舎での豪華な祝宴に向かってゆっくりと進行した。

新任行政官のうちの二人はバッハの貢献に多いに感激し、喜んでこの曲の総譜とパート譜の印刷資金を提供した。これが、バッハの全カンタータ中、唯一存命中に出版された作品だったという事実は、我々には皮肉な驚きかも知れない。この管弦楽法の天分と魅力、大胆な音のコントラストによる歓喜、複雑に並ぶ声部と楽器の斬新で巧妙な操作をしても、恐らく風変わりに寄せ集められた歌詞のためか、「神は我が王」はバラバラでまとまりを欠く作品である。ミュルハウゼン・カンタータの中では、これだけがバッハが修練期にある初期の作だと感じさせる。但し例外がひとつだけあり、後から2番目の合唱曲(No.6)はこのカンタータの優れた果実で、それは極度の沈黙、繊細さ、そして最上の精妙な響きが歩を進める楽章だ。

© John Eliot Gardiner 2008

From a journal written in the course of the Bach Cantata Pilgrimage